

# 自分の考えを表現できる児童の育成 ～学び合い活動を通して～

研究協力校（1年次）

墨田区立中川小学校

## 1 研究主題について

### (1) 主題設定の理由

本校では、平成22年度から平成24年度まで、表現力の向上を目指して国語科の研究を行った。その結果、自分の思いを表現できる児童が増えてきた。しかし、区の学力調査の平均正答率では、本校の児童は「表現・処理」、「知識・理解」についての問題把握や数学的な考え方を問う問題に対しての正答率が低い傾向にあることが明らかになった。授業場面においては、自力解決や比較検討する際に、答えが分かっているにもかかわらず自分の考えや思ったことを書けなかったり、話さなかったりする場面も見られた。さらに、個々の学力差も大きく、自分の考えや思いを表現するまでに至らない児童もいた。この実態から、国語科の研究で育成した表現する力を算数科へと広げていくことの大切さを痛感した。算数科の学習では、筋道を立てて考えを深めていくことが大切である。見通しをもって解決するまでの筋道を図や式で書き表したり、他者と話し合ったり、共有したりすることで、自分の考えを分かりやすく伝えるための表現力を育てていきたいと考えた。これらのことから、算数的活動を通して既習事項を生かし、自分なりに解決できる児童、および自分の考えをいろいろな方法で表現できる児童を育成するため、平成25年度から2年間、研究主題を「自分の考えを表現できる児童の育成～算数的活動を通して～」として算数科における表現力の育成に取り組んできた。

2年間の研究の成果として、既習事項から解決の手立てを思い出したり、見つけ出したりして自力解決できる児童が増えてきた。また、一時間ごとに見開きでノートを作っていくことによって、ノートの書き方が定着し、言葉や図や式などを使って自分なりの考えを表現できるようになってきた。しかし一方で、互いの考えを発表し、それをもとに話し合ったり、共有したりすることで、自分の考えを分かりやすく表現し伝えることが苦手な児童が多いことが明らかになった。

そこで今年度から2年間、墨田区教育委員会研究協力校として、発表・検討の場面に重点を置き、副主題を～学び合い活動を通して～として研究をすすめることとした。自分の立場を明確にすることで、誰に対して発表しているのかを認識させ、それにより子どもたち同士での学び合いを深めさせることを通して、自分の考えを表現できる児童を育成する。

## 2 研究の概要

### (1) 研究の方法

- ① 今年度の校内研究年間計画・研究構想について提案、分科会での検討
- ② 講師による示範授業による研修
- ③ 研究構想についての検討
- ④ 児童の学習状況調査および意識調査の実施と考察
- ⑤ 低・中・高学年分科会で研究授業案の検討
- ⑥ 研究授業11回（算数科全9回、及び図画工作科・音楽科）
- ⑦ 研究の成果と課題の検討

(2) 研究の構想図

本校の教育目標 ・よく考え、進んで学習する子 ・思いやりの気持ちを持ち、仲良くする子 ・からだをきたえ、ねばり強く努力する子	<b>研究主題</b> <b>自分の考えを表現できる児童の育成</b> <b>～学び合い活動を通して～</b>	教師の願い ・進んで問題に取り組んでほしい ・自分の考えを書いたり、話したりしてほしい
---	---	---

(サブテーマ)

基礎基本を身に付け、自分の考えを表現する力を育てる。	基礎基本を身に付け、学び合い、問題を解決する力を育てる。	学び合い活動を通して、表現する力を育てる。
----------------------------	------------------------------	-----------------------

(児童の実態)

低学年分科会	中学年分科会	高学年分科会
・基礎基本の定着にばらつきが見られる。 ・自分の考えを図や文で表現する力が不足している。 ・既習事項を使って考えられない児童がみられる。	・基礎基本の定着にばらつきが見られる。 ・文章問題を読み取る力が弱い。 ・自分の考えを発表する児童が少ない。	・基礎基本の定着にばらつきが見られる。 ・既習事項を使って、自分の考えを表現する力が弱い。 ・自分の考えを発表する児童が少ない。

(めざす児童像)

・既習事項を生かし、自分なりに解決し表現できる児童。 ・学び合い活動を通して、考えを深めることができる児童。
---

(仮説)

・既習事項を想起できるようにすれば、意欲的に問題解決しようとする児童が育つだろう。 ・主体的な学び合い活動の場を設定すれば、自分の考えをより深められる児童が育つだろう。
---

低学年分科会	中学年分科会	高学年分科会
・既習事項を思い起こさせる場面や手だてを設定すれば、問題を解決できるだろう。 ・自分の考えを明確にさせれば、進んで表現する児童が育つだろう。	・基礎基本の定着に力を入れることで、既習事項を生かして問題解決に取り組むことができるだろう。 ・課題に取り組む際、自分なりの考えをノートに書かせ、発表する機会を設けることで、表現する力が育ち、考えを深めることができるだろう。	・課題に取り組む際、既習事項を生かして、自分なりの考えをノートに書くことで表現する力が育つだろう。 ・学び合い活動に【同じ考え、違う考え】という観点をもって取り組むことで、論理的に表現する力や友達の考えを理解する力が育つだろう。




(各分科会および全校による取り組み)




☆年間を通した全学年の研究主題に沿った授業研究とその分析・考察		
・ノート指導 ・既習事項の確認 ・意欲を持たせる問題の工夫 ・レディネステストの活用 ・具体物を使った教材教具の開発 ・自力解決の時間の確保 ・話し合いの場の設定 ・ネームマグネットを使った発表の工夫	・ノート指導 ・既習事項の確認 ・自分の問題として直面させる問題の工夫 ・レディネステストの活用 ・少人数体制 ・自力解決の時間の確保 ・比較検討の場の設定 ・ネームマグネットを使った発表の工夫	・ノート指導 ・既習事項の確認 ・考えさせる価値のある問題の工夫 ・レディネステストの活用 ・少人数体制 ・自力解決の時間の確保 ・比較検討の場の設定 ・ネームマグネットを使った発表の工夫
・計算タイム（毎週火曜日） ・校内学力テスト（年3回）		

(3) 研究の授業実践

低・中・高の3分科会を構成し、各担任・専科が1回ずつ研究授業を行った。

【講師】弘前大学教育学部教授 中野 博之 先生

学年	単元名 ○本時のねらい	◎成果 ▲課題
1年生	<p>ひきざん ○繰り下がりのあるひき算に興味をもち、計算の仕方を考える。</p> 	<p>◎積極的に発言し、楽しんで授業に参加していた。 ◎「似ている。」「違う。」など、児童に比較する視点が身についていた。 ◎既習事項を思い出させる声かけができていた。</p> <p>▲ブロック操作が分かっていない児童がいた。キーワードを確認して、実物投影機を使って児童が説明してもよかった。 ▲出された考えに対し、「似ている点を探す。」など視点をもてるとよかった。</p>
2年生	<p>九九のひょう ○ものの数を、乗法を用いて多様な方法で考え表現することができる。</p> 	<p>◎考えを説明したり、1つの考え方だけでなく複数の考え方をしたりするなど学習の姿勢が育っていた。 ◎みんなで練り上げて考えを共有し、よりよい考えを出し合い適用するという授業のスタイルは確立してきた。</p> <p>▲まとまりを作るという発問によって子供の考えが広がらなかった。違う発問であれば違う反応が出てきたのではないか。 ▲同じ考えでも違う児童に発表させることや、発表した児童に対してさらに考えるように促すことで、より理解が深まったのではないか。</p>
3年生	<p>あまりのあるわり算 ○あまりも一つ分として処理する問題の意味を理解し、適切な処理の仕方を考えることができる。</p> 	<p>◎課題を与える時間と取り組みの時間が適切であった。 ◎自力解決が難しい児童へのヒントカードが見やすかった。 ◎既習事項を使って考えていた。</p> <p>▲答えが異なった場合の発表の順番を考えるべきであった。 ▲あまりの分も追加する式(7+1)を、しっかりとおさえる必要があった。 ▲教師が児童の発表の支援をしすぎてしまうと良くない。</p>

<p>4年生</p>	<p>小数 ○小数（第二位まで）のたし算の仕方を考え、筆算で計算ができる。</p> 	<p>◎児童一人一人が自分の意見を意欲的に書けていた。 ◎ネームマグネットを活用することで、自分の考えがどの考えに相当するのか明確になった。</p> <p>▲児童の考えの取り上げ方や発表のさせ方を精選すべきだった。 ▲まとめの際、教師主導ではなく子どもの意見を取り上げて行う。 ▲共通点を気付かせる手立てが必要。</p>
<p>5年生</p>	<p>単位量あたりの大きさ ○ひよこの数と面積の2量の組み合わせでとらえられる量の比べ方を考えることができる。</p> 	<p>◎ネームマグネットの活用と、児童が前で説明をすることで、誰に対して発表しているのか立場が明確になった。 ◎問題文の図を提示したことで、1㎡当たりの数がわかりやすかった。</p> <p>▲児童が煮詰まった場面では、グループやペアの活用をする。 ▲丸投げにするにも最低限、混み具合の意味を理解させる必要があった。 ▲検討場面で、理解できた友達の考えをノートに写せるとよい。</p>
<p>6年生</p>	<p>比例と反比例 ○比例の考えを生かした解決方法を説明することができる。</p> 	<p>◎自分の意見をノートに書き、いろいろな考え方を書くことができていた。 ◎ネームマグネットを使って自分の考えを表し、説明することができていた</p> <p>▲ヒントカードなど教具を精選する必要があった。 ▲自分の言葉でまとめることができていなかった。 ▲子ども同士の意見の交流の時間が少なかった。</p>

### 3 まとめと今後の課題 (◎成果 ▲課題)

- ◎既習事項を活用して自力解決を行い、さまざまな考えをノートに書くことができていた。
- ◎発表・検討の場面でネームマグネットを使うことで、自身の立場を明確にし、全ての児童が学習に参加できる授業形態となっていた。また、発表場面でも、誰に対して説明をすればいいのかが明確だった。
- ◎相違点や共通点等を比較する視点が身に付いてきた。
- ▲まとめの際に教師主導で行いがちになってしまっていた。検討後、児童の言葉でまとめさせたい。
- ▲発表・検討場面で、児童の考え方の取り上げ方や発表のさせ方を精選する必要があった。発表の順番で児童の気付きも変わるので、事前に予想をしておく必要がある。
- ▲児童が発表する際に、共通点を気付かせる手立てが必要だった。教師が黒板に意図的に書

き込んだり、印をつけたりすることで気付かせたい。